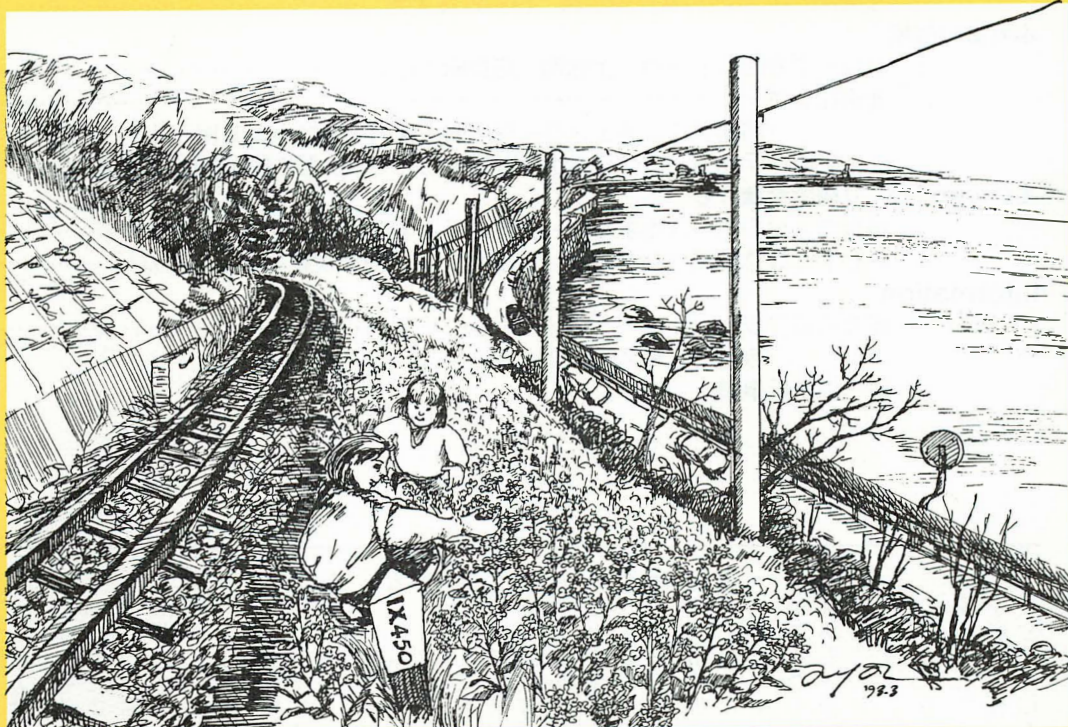


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 39



双海町 菜の花畑

特 地域の顔をつくる 集

『自然を活かして』

- 「肱川あらしと開閉橋の町」の町づくり
- 自然とのふれあいを求めて
- 美しい海を利用した活性化対策
- 出会いふれあい「山の仲間たちの宿」十年のあゆみ
- 夕日に魅せられたまち

アングル

中小企業と地域づくり……………愛媛県中小企業団体中央会会長／富田 洋司…………… 1

特 集 『地域の顔をつくる』

—自然を活かして—

「肱川あらしと開閉橋の町」の町づくり……………	長 浜 町／洲尾 計邦……………	2
自然とのふれあいを求めて—四国の屋根から世界へ飛び立とう—……………	面 河 村／松岡 正人……………	4
美しい海を利用した活性化対策……………	西 海 町／本多 幸雄……………	6
出会いふれあい「山の仲間たちの宿」十年のあゆみ……………	別子山村／仲村 孝三……………	8
夕日に魅せられたまち・双海町……………	双 海 町／若松 進……………	10

レポート

生きがいを求めてPART 2……………	～第8回地域づくり交流研修～……………	12
'93地域づくり西日本交流会議 日田玖珠大会……………		14

ふれあい広場

リレーでちょっとーク（土居町・広見町から）……………		16
元気印レポート……………		18

〈四国のマンチェスター保内町—保内まちなみ倶楽部—〉

〈手づくりイベントで大西町の良さをPR—大西町夢海道196風おこし—〉

えひめ地域づくり研究会議から

地域づくりのベースを求めて—管見スイスを歩いた2週間／見想録X……………		22
さわやかな危機感 わが組織 わが地域 —'93年次総会フォーラム—……………		24

Information

媛のくにフラッシュ……………		27
〈今治市・瀬戸町〉		
海への手紙事業		

特集 “地域の顔をつくる” 今号のテーマ

—自然を活かして—

日本は古来より「山紫水明」の美しい自然に恵まれ、日常の生活はもとより、農耕に魚猟にと数多の恩恵に浴してきた。しかし、戦後の高度経済成長は、一方で、過疎・過密を進行させ、都市部の生活環境の悪化や農山漁村地域における活力の減退をもたらせてきたことは周知のとおりである。

一方、人々の価値観は、時代とともに「もの」から「ところ」へと大きく変化し、今日、人々は自然とのふれあいの中でうるおいややすらぎを求めるようになってきた。

今、地域資源を再評価し、豊かな自然を活かして地域づくりに取り組むことが求められているのではないだろうか。自然へのかかわり方は様々であるが、自然と共生することで自然も人間も豊かになっていくものと思われる。

「舞たうん」では、前号より県内各地でそれぞれの地域特性を活かし、個性ある「顔づくり」を進めている市町村にスポットをあて、特集を組んでまいりました。

今回は、その第二弾として、「自然を活かして」のテーマでまちづくりを展開されている地域にご登場願うことと致しました。

表紙の言葉

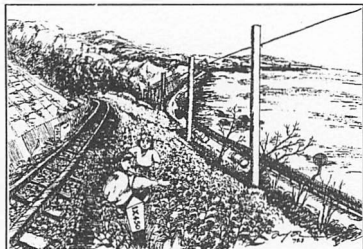
『夕やけこやけライオン』が出来て、双海町から長浜方面は走り易くなりました。

何より嬉しいのはワイドな青い海岸線と、山側の花街道です。つわぶき、水仙、菜の花畑が一面を覆い、コスモスへと四季折り／＼楽しませてくれます。

JR線で一番海に近い駅がある。

それよりも双海は夕日のもつとも美しい町。残念な事に私は夕日の沈む双海にまだ遭遇出来ないのです。

柳原あや子



双海町 菜の花畑

中小企業と地域づくり

愛媛県中小企業団体中央会

会長

富田 洋司



人、だれしも自分が住んでいる地域を豊かで住みよい地域にしたいとか、自慢と誇りある地域にしたいと思っているのではなからうか。

これまでも、「豊かな地域づくり」を目指して、各地でシンポジウムやフォーラムが開催されてい

るし、地域活性化を図るためのイベントや村おこし事業も、盛んに行われている。

このような地域活性化のための、各種イベントや行事等の開催には、中小企業もそれぞれの地域社会の中で、個人と同じようにコーポレート・シチズン（良き企業市民）として存在していることを再認識するとともに、その強力な担い手としての社会的責任、役割を果たすべきだと考えている。

特に、中小企業は、そこに勤務する従業員の経済的な面はもとより、雇用面においても地域社会と密接に結びついており、経営者自身もそれぞれの地域における伝統文化の継承や各種行事をはじめ、生活文化、福祉、環境等の諸活動に対し、積極的な推進者として地域社会の中で重要な役割を担っていると思うのである。

また、一昨年、中小企業庁が策定した「九〇年代の中小企業の組織化政策ビジョン」の中では、「各地域に於て地域振興が図られている中で、個性ある地域づくりの必

要性が高まっているが、地域中小企業は、地域づくりを進めるうえで大きな役割を果たすことが期待されている」とされ、さらに「地域中小企業は、地域単位または業種単位で組織化し、中小企業自らの経済力の向上のみならず、地域経済を代表する存在の一つとして地域振興に貢献する」と、その必要性が強調されている。

このことは、それぞれの中小企業が、地域の振興発展のために、地域の文化や教育、人間関係、生活環境、地域福祉等の各分野にわたって、社会貢献や支援活動を行うことはもちろんのこと、中小企業が組織化を図り、地域産業としての活力を維持し、地域経済の発展に貢献することも極めて重要な役割であるということにほかならない。

すでに愛媛県においては、「生活文化県政プラン21」で、力強いいきいきとした産業づくりを基本政策の一つにおかれ、技術振興基盤の整備をはじめ、地域産業の高度化・ソフト化など具体的な施策

を展開し、潤いと活力ある愛媛づくりを目指しておられますことは、私ども中小企業にとって誠に心強い限りであります。

中央会としても、愛媛県をはじめ関係各位のご指導ご協力を頂きながら、生活文化を重視した産業づくり、人づくりをさらに推進するとともに、地域づくりのけん引力となる魅力ある中小企業や組合を目指し、環境変化に的確に対応するための組織化の推進をはじめ、人材の養成や中小企業の連携促進さらには中小商業の活性化などを積極的に推進して参りたいと考えております。



地域の顔をつくる ～自然を活かして～

「肱川あらしと開閉橋の町」の町づくり

長浜町役場 計邦 洲尾

「肱川あらしと開閉橋の町」長浜町をご存じだろうか。一級河川「肱川」の河口に開けた町、「肱川あらし」の吹く町、開閉橋「長浜大橋」、伊予の名瀑「白滝」、四国八十八カ所番外札所霊峰「金山出石寺」のある町が、我が長浜町である。

県都松山市から国道56号線を南進し、伊予市で海岸へ分岐する国



度から平成四年度にかけて肱川を中心とした町づくりをしようと、両岸に位置する資源と四季をリンクさせるべく、春は沖浦の桜、夏

道378号線へと車を走らせる。右手に瀬戸の島々と伊予灘の海岸美を見ながら、双海・長浜町間の「夕やけこやけライン」を西走すると、広々とした拓海・晴海の工業団地が見えてくる。

この団地を過ぎると、長浜港に臨む全人口の約三〇パーセントが集中する長浜町の市街地に入る。

長浜町は、古くは町の中央を貫流する肱川の水運を利用して、秋田の能代、三重の新宮とともに日本の三大木材集散地として、その名を馳せた時代もあったが、現在では、人口約一万一千人、面積七四・七平方キロメートル、農林水産業をはじめ工業団地の製材業など様々な産業が町を支えている。

❖四季を活かして

「ふるさとづくり」

はサーフィンなどの小浦リバーサイド、秋は伊予の名瀑「白滝」、冬は肱川あらしの展望と、それぞれ特徴を活かした「肱川水系リバーサイド整備プロジェクト」を実施した。

❖四季への誘い

春といえば沖浦観音。桜の名所としても知られ、藤原時代を代表する豊満優美な一木彫の国指定重要文化財「木造十一面観音立像」を宝蔵し、四月十七日の縁日には、大勢の参詣客で賑わう肱川左岸の萬松山瑞龍寺。この丘へのアクセス整備が「沖浦さくら道」である。

また、そこから上流へ約一・五キロメートルの所に、若者のマリンスポーツウインドサーフィンをメインとした「小浦リバーサイドスポーツパーク」を整備した。川幅約三百メートル、県内唯一、河口でサーフィンが楽しめることにも、子供からお年寄りまで三世代の憩える公園である。



さらに、河口から上流に約六キロメートルばかり行くと、伊予の秋を代表する名瀑「白滝」がある。「秋の白滝 木と木のみじ山は錦の幕をはる」と

詩人野口雨情も絶賛したように、春は新緑、夏は涼、そして秋にはもみじと変化に富んだ溪谷美を有する。特に高さ六十メートルから垂直に滝壺へ落下する雌滝をはじめ、八十メートルの落差を有する雄滝など大小七つの滝は、JR予讃線白滝駅から徒歩で約十五分と日本一駅から近い滝といわれる。この公園一帯の遊歩道を「白滝めぐり自然遊歩道整備事業」として整備、溪谷美と安らぎを求めて訪れる観光客に喜ばれている。

❖川霧の荘厳なドラマ

「肱川あらし」

さて、いよいよ世界に比類なき「肱川あらし」の登場である。肱川は、本流の長さ百三キロメートル、流域面積は県土の約二一パーセントを占める一千二百十平方キ

ロメートル、四国第四位、全国で五十五位の大きな河川である。

また、支流も全国第五位で四七五河川もあり、これらの水がすべて長浜から伊予灘に注ぎ込む。

この流域には宇和、野村、大洲の盆地があり、晴天の穏やかな日没後、大洲盆地で涵養された冷気が、秋から冬にかけて南東風として肱川河口に白い霧を伴って強風をもたらす。これが「肱川あらし」である。

白滝付近から強風となり、河口の長浜大橋付近では毎秒十メートル、時には十六・十七メートルの「あらし」が午前十時ころまで吹き出し、伊予灘の海上四・五キロメートルにも達する。

広く世界に目を移しても、局地



白 滝

と切っても切り離せないのが長さ二百二十六メートルの動く橋「長浜大橋」である。親しく「開閉橋」、「赤橋」とも呼ばれている。

動く橋は、跳開

風のみが吹き出した

り、霧が停滞する事例はあっても、このように冷気に霧を伴って吹き出す自然現象は他に例もなく、

視界をも遮る自然の営みは、まさに神秘の世界の出現、さながら荘厳な川霧のドラマである。

やがて扇状的に大きく広がる霧を辿ってゆくと、遠くは中国地方にも及ぶマリンブルーの伊予灘、瀬戸の島々をパノラマ的に望む感動は、筆舌に尽くし難い。

ところで、この「肱川あらし」と切っても切り離せないのが長さ二百二十六メートルの動く橋「長浜大橋」である。親しく「開閉橋」、「赤橋」とも呼ばれている。



肱川あらし

橋、昇開橋などに

分類されるが、長

浜大橋は有名な東

京の勝閑橋より五

年も早い昭和十年

に架橋され、我が

国に現存する道路

可動橋としては最

も古いものである。

今、私たちの町

では、この橋を観

光資源として、ま

た、近代化遺産と

して、

文化・土木の両面から

光を当てた町づくりを

進めたいと考えている。

特に、「肱川あらし」

が開閉橋を吹き抜ける

様は、自然と近代化遺

産が融合し、他に追随

を許さない光景であり、

この大自然の眺望を楽

しんでいたとき、町づ

くり活かそうと道路

や展望台などを整備し

たのが、「肱川あらし

展望公園ルート整備事業」である。

このルートまでのアクセス整備

は、もうしばらくの間完成を待た

なければならぬが、JR伊予長

浜駅裏の県道（道が狭いが）を利

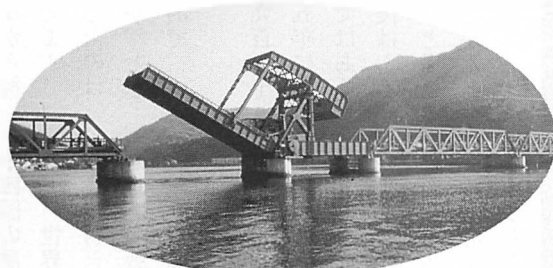
用すれば公園まで車で登れる。

ともあれ、海と山と川の自然が

彩なす山紫水明の町「長浜」の大

自然、是非とも皆さんに満喫して

いただきたい。



長浜大橋



特集

地域の顔をつくる ～自然を活かして～

自然とのふれあいを求めて

—四国の屋根から世界へ飛び立とう—

(面河村、野村町交流事業)

面河村役場 松岡 正人

❖面河村の概要

当村は、愛媛県の中南部に位置し、西日本最高峰石鎚山をはじめ、岩黒山、筒上山、堂ヶ森など、千四百メートルを越す山々に囲まれた村です。

北西側は周桑郡と温泉郡、西は久万町、南は美川村、南東側は高知県の池川町、本川村に接しており、ちょうど蝶が羽を広げたような形をしています。

❖面河、自然自慢

面河は霊峰石鎚の湧き水に恵まれ、水の豊かな村です。天狗岳の山懷を源流とする面河川は、多くの支流を集め割石川と合流し、美川村、柳谷村を潤して高知県を走り、仁淀川と名を変え、はるか太平洋に注いでいます。蒼く、白い流れの中で、あまごをはじめ川魚たちが、澄んだ水面を舞い、群れています。

面河溪、石鎚山の魅力は皆さんご存知だと思いますので、大変な体力を要し、道案内がなければ現地へはなかなか行けない「御来光の滝」を紹介します。

御来光の滝は、天狗岳の山懷を源とした面河川の最上流部にあり、平成二年には「日本の滝百選」に選ばれました。この滝を訪れるには、どのルートもたどるにしても片道二〜三時間は優にかかります。人跡未踏とか、秘境といった言葉がぴったりの険しい場所にあり、一の滝、二の滝、三の滝からなり、合計の高さは一〇一・六メートルにもなります。

絶壁から凄まじい勢いで落下す

る水は、砕け、弾け、さながら純白の竜の化身のように見えます。その昔、役の行者が修業したのはこの滝だったのではないかと、思わせるに十分なほど神秘的で、ロマンチックな滝です。

昭和二十五年には四千九百七十三人だった人口も、平成五年には約一千二百人と過疎の村ではあります。ですが、離村した人も老後はふるさとで心豊かに過ごしたいと多くの人々が望むように、村全体が水と緑の宝庫です。

❖四国の屋根から

世界へ飛び立とう

「野村と面河の四季を体感しながら開発教育を学ぼう」と、平成五年度に面河村と野村町の交流事業が実施されました。

これは、学校週五日制を利用して、四国を代表する自然豊かな大野ヶ原、面河溪、石鎚山等の美しい四季の変化を子供たちに体感させるとともに、自然への関心、人への関心を高め、豊かな人間性を養うことを目的として、郷土愛媛



と国際社会を考える会、面河村、野村町が主催し、愛媛県ほか七団体の後援により行なわれたものです。

平成五年五月八・九日、十月九・十日は野村町、平成五年八月七・八日、平成六年一月八・九日は面河村で実施され、面河村からは小学六年生全員と野村町、松山周辺の子供たち約六十人、多数の講師、指導者、ボランティアの方々が参加しました。

主な行事・活動内容は、マウン

テンバイクでの四

国カルスト大野ヶ

原登山や原生林探

検、石鎚森林ウォ

ッチングやつり大

会、また、パラグ

ライダーに挑戦し

たり、真冬の寒さ

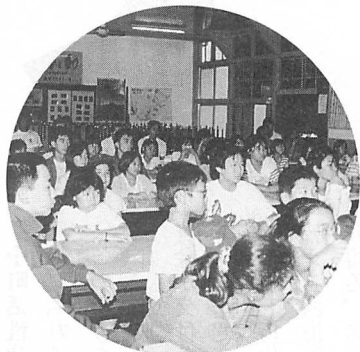
の中でネイチャ

ーゲームなど、自然を相手に新し

い友との出会い、ふれあい、そし

て挑戦でした。

特に面河の子供たちは、他の町



村の子供たちと一
緒に活動したり、

交流したりする機

会が少なく、引ッ

込み思案で消極的

な面が多々あり、

人の前で話しをし

たり、積極的に友

達をつくることが

苦手な子供もいま

でも、いろいろな仲間と寝食を共

にし活動できたことは、子供たち

にとつて貴重な体験であり、大き

な自信となったことと思います。

また、昨年の異常気象、大きな

地震、冷害による不作等々、自然

の前に人はただ茫然となりました。

「地球にやさしく」と地球環境を

守っていこうとする気運が高まっ

ていますが、子供たちはどのよう

に感じているのでしょうか。家庭

や学校、地域で身近な問題として

捕らえなければ、関心を持つ「芽」

も育たないのではないのでしょうか。

先ずは、私たち大人がより関

心を持ち、今できることから一つ

ひとつ実践していくことが必要で

はないでしょうか。

今後もしろいろな活動に積極的

に参加し、体験し、自然・人とふ

れあい、学問だけでない「知識」

を身に付けてもらいたいと思いま

す。

この交流事業の目的のように、

自然への関心、人への関心を持ち、

これからの世界に通じる国際人と

して、視野の広い豊かな人間性を

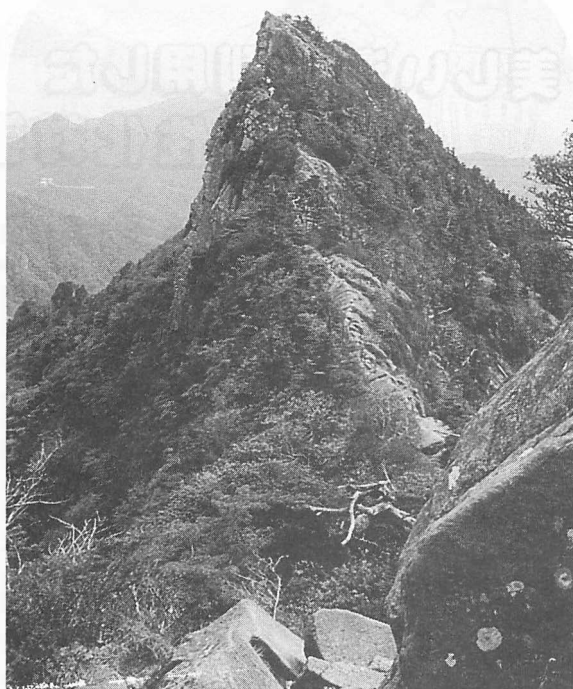
持った子供に育ってほしいと思

います。

最後に、お世話くださった皆様

に心から感謝し、改めて自然の恵

みに感謝したいと思います。



地域の顔をつくる ～自然を活かして～

美しい海を利用した 活性化対策

西海町役場 本多 幸雄

西海町は愛媛県の西南端に位置し、東は城辺町、御荘町に接し、南は宿毛湾、西および北は宇和海に面して半島状の地形になっている。

西海町の沖を流れる黒潮は、それに乗って回遊してくる魚をはじめ、色とりどりのサンゴや熱帯魚が泳ぐ「海の別天地」を作っている。特に鹿島、横島を中心とした海中の景観は、多彩なサンゴ類など変化に富み、学術的、教育的、

観光的な価値が高く、昭和四十五年七月には全国第一号の海中公園として指定を受けた。

❖西海町観光事業のあゆみ

町は海中公園の指定を受けるに当たり、観光事業を主要産業と位置付け、鹿島に国民宿舎を建設し、町営旅客船事業として旅客船、グラスボートの建造など施設整備を進めてきた。また、民間においても増加する観光客に対応するため、中泊地区を中心に民宿経営が始まり、最盛期の昭和四十九年には五十数軒を数えるほどの盛況振りであった。

しかし、旧態依然とした家族療

養型観光を

続け、余暇

時間の増大

に伴う観光

客の多様な

ニーズに応

えられず、

新たなセー

ルスポイン

トも打ち出

せずにいた

ため、昭和

四十九年の

オイルショックを境に観光客は減少を続け、昭和六十三年には最盛

期の二十九万人に比べ五分の一の

六万五千人にまで落ち込んだ。

❖町活性化の起爆剤

「ガイヤナ」就航

このような状況の中、昭和六十三年、平成元年度にふるさと創生資金が交付される際、この使途について町民アンケートを行ったところ、老朽化したグラスボートに替え、西海海中公園観光の顔と成り得る、スマートで明るい観光船



の建造を求

める声が多

く、先進地

視察等を重

ねた結果、

船体に個性

のある半潜

水型水中展

望船を建造

することに

なった。半

潜水型水中

展望船は、

客室が水面下であり、船底真下の

海底しか見えなかった従来のグラ

スボートに比べ格段に視野が広く、

また立体的に海中の景観を楽しん

でもらうことができる。しかし、

本当に町観光復興の起爆剤と成り

得るのかと危惧を持つ町民も多く、

また、町議会においても慎重論が

強かったため、実際の建造に至る

までにはかなりの検討が行われた。

平成四年四月二十六日に半潜水

型水中展望船の第一号が就航した。

同型の展望船は、鹿児島県南郷



2」を就航させた。

テレビのスポット放送などの宣伝効果が実を結び、「ガイアナ」の就航以来、乗客は十万人を超え、西海町を訪れる観光客は順調な伸びを示している。

当初のくろみ通り、「ガイアナ」の就航により、「観光の町西海」をより鮮明にアピールすることができ、町の顔としてイメージアップにもつながったものと思う。

◆今後の課題

好評の「ガイアナ」であるが、問題点もいくつかある。

まず気象条件の悪化による欠航が事前に連絡できず、欠航と知らずに来た観光客に迷惑をかけることが度々あることである。また、こういう事情から旅行業者も旅行日程に組み入れづらく、大型バスでの大量人員の観光が望めないことである。

これは観光地としてのイメージダウンにつながり、解決すべき大きな課題の一つとなっている。

もう一つは、観光シーズンの片寄りの問題である。海の観光であるため、どうしても春、夏に観光客が集中して冬期には極端に減少する。この間にイベントを催すなど、今後、集客力の向上に努めなければならない。

◆美しい海を後世に

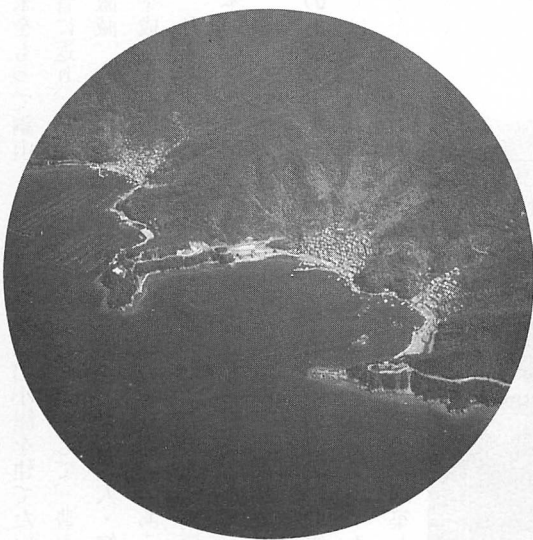
昨年九月、全国に大きな被害をもたらした台風13号は、当町にも大きなつめあとを残した。

特に海中公園のテンプルサンゴに多くの被害を受けたことは、「海のお花畑」をアピールしてきた当町には大きな傷手であった。復旧作業はダイバーの手作業に頼るしかなく、破片の整理程度の

ことしかできない。自然の力によるものとはいえ、自然保護の難しさを痛感させられた。

また近年、海中の透明度が以前に比べ落ちてきたと言われている。その原因の一つとして、生活雑排水による汚染が考えられる。

西海町は海あつての町。海に暮らす方法こそ違え、人は海にかかわって生きている。後世にこの美しい海を残すためにも、下水の合併処理の推進など、海を汚染から守る努力が必要となっている。



地域の顔をつくる ～自然を活かして～

出会いふれあい

「山の仲間たちの宿」十年のあゆみ

別子山村葛籠尾山荘

仲村 孝三

❖健康で豊かな山村楽園

別子山村では、「きれいな水」「おいしい空気」「美しい緑」の自然に恵まれた平和で人情味豊かなふるさと、そして、農林業・観光等の諸産業に活力があり、教育・文化・スポーツに潤いがある健康で豊かな山村楽園を目指し、住民のための村づくりが進められている。まずは、村内県道の二車線化に優先して取組み、これと併せ農林業・観光を振興することにより、

過疎脱却と地域振興を図ることとされている。次に、若者定住と高齢者福祉に重点を置き、村に住んで幸せを感じ、永住したくなるような村をつくり、一時の社会情勢だけに捕らわれない山村のアイデンティティーを確立することが基本的方針とされている。

❖過疎の実態（人口の移り変わり）

別子銅山として広く世に知られ、元禄四年以来、住民は住友企業と深い繋がりを持ちつつ、銅鉱山の採掘・運搬・精錬等の労働に従事し、政治・経済・文化・その他の日常生活にわたって共通した生活圏がつくられ、明治中期には一万二千人の人口を抱えた大都会的存在であった。明治三十二年、豪雨による災害は銅山の生活・生産を根底から崩し、

さらに、精錬所の移転などにより人口は漸減の一途をたどり、大正二年には、三千十八人と記録されている。



に取組んだのです。山間僻地の農作業は苦勞も多かったのですが、余暇を活用して閉山跡の住宅の廃材を集

昭和四十八年三月末をもって銅山は閉山し、村は大昔に返り、昭和五十年四百三人と激減、如実に過疎の現象を現し、平成二年三百十八人、平成五年十二月末三百十六人と、今では西日本一のミニ自治体となった。

❖夢を形に―十年のあゆみ―

本稿におきましては、私の「夢を形に」と歩んできた十年間の実践報告をしたいと思ひます。

私は子供のころから、大自然の中で物を作り育てることが大好きでした。そんなことから、昭和四十八年三月、親や妻の反対を押し切って役場を退職し、農業

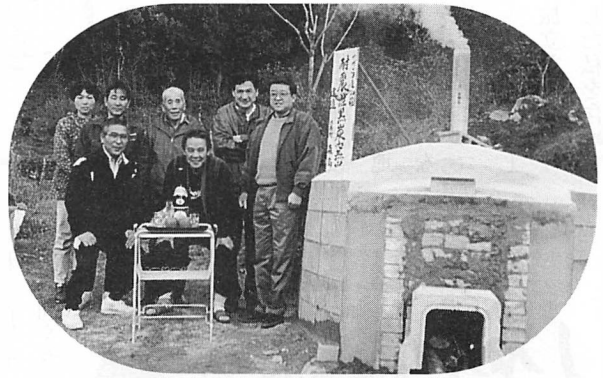
め、いつかは山小屋を建てたいと思っていました。そして、豊かな自然を求め帰って来る友人・知人のために、心のふれあいのある地域として潤いと活力のある高原行楽地にしたいと考えました。

昭和五十七年から農作業の暇にコッコツと山小屋の建設に取組み、平成五年にやっと夢を実現することができました。その後増築し、



今では「葛籠尾高原東光森深山の小屋」と呼び、子供や家族連れに親しまれるふれあいの小屋「友の家」、登山者・山の仲間たちの心の小屋「憧山の家」、お年寄り志向のやすらぎの小屋「憩いの家」、酒を汲み交わし清談に花咲く小屋「よもだの家」があり、それぞれの小屋には、小屋の目的にあったストーブの間、囲炉裏の間、火鉢の間、小室があり、五右衛門風呂・ドラムカン風呂、水洗トイレなどが設備された小屋もあります。ここに集まる人は、食べ物すべて自分で持込みをしてもらい、「来たときよりも美しく」を合言葉に使用してもらっています。

また、赤石山系の自然を愛する仲間たちが資金などをカンパして、



口径八センチ、倍率三十倍の大型双眼鏡を設置しており、三百六十度の大パノラマが楽しめます。さらに、別子山村産の薬草を活用した牧口弘幸氏（香川県）の設計・建造による岩風呂があり、仲間たちの健康管理とともに、裸の付き合いの中から人間性を養うことに役立っています。

平成五年には、炭焼きで炭の文化を追求するとともに、炭の付加価値を高めようと、仲間たちで「炭研会」を結成し、日本炭焼の会副会長杉浦銀治氏がデザインし、森高準一氏の施工による、出炭量二百五十キロの近代窯も完成しました。かつては村の生活と大きなかわりのあった炭焼きであり、今は炭焼き体験窯として活用し、村内外の人たちとの交流を図り、

観光立村の大きなステップとして村の活性化に役立てたいと考えています。

これまで、葛籠尾高原に山村楽園をという夢を形にと頑張ってきたが、十年で青写真は実現し、節目の年を迎えることができました。

十月三十一日には、県内外から八十三人もの仲間が集まり、十周年記念祝賀会を催していただき、交流を深めました。この祝賀会に寄せられた言葉の中に、次のようなものがありました。

「銅山川の自然は美しい。」

の自然の感触は夢うつつ。まさに雲上の心地がする。ここから見る赤石の山並みは四季折々に衣を替えて、人の心を慰め、清流は心を浄めてくれる。慌ただしい昨今の世相



の中で、人間が人間らしさを取り戻すことのできる圏域である。私は、この様な思いから、ここをリフレトピアと呼びたい。心のふれあいはここを源とし、そして、銅山川の流域が自然清流の都となることを願ってやみません」。

自然を活かし、人々の交流の拠点づくりに努めた成果の現れと、本当にうれしく思います。

今後は観光農業を手掛けてみたいと考えています。快適で活力のある農村づくりのためには、森林農園、市民農園、観光農園の三つの方法があると考えます。高齢化が進み農業の担い手不足が言われますが、農林産物に庭先で付加価値を付けるため、土地条件、家族構成を活かした農園に取組み、全農家が親しまれ喜ばれる民宿を実現することを願って終わります。

特集

地域の顔をつくる ～自然を活かして～

夕日に魅せられたまち ・双海町

双海町役場 若松 進一

一九八六年（昭和六十一年）六月三十日、梅雨の晴れ間を縫うように、日本で一番海に近い下灘駅で「夕焼けプラットホームコンサート」が開かれた。これといった観光資源もなく、文化的施設もなく、すぐ海、すぐ山の急峻な地形を嘆くばかりの、まるでないないうづくしの双海町にとってこのコンサートが、後の「夕日を活かしたまちづくり」の旅立ちになるうとは、企画・実行した私を含めて



誰もが予想していなかった。すべての費用を寄付と労力奉仕でまかなうという、その場しつらえにも似た手づくりのコンサートは、日本フィル・トロンボーン奏者北原和人氏、旧国労コーラスGトレインズ等の出演もあつて約八百人の参加を得、NHK番組「西日本の旅」の電波に乗って、あつと言う間に日本の各地に紹介され、話題となった。以来、夕焼けコンサートは地元若者の運営に委ねられ、台風襲来で当日中止となった第三回を含めて、昨年まで休む

事なく八回目を数え、愛媛を代表するローカルイベントとして今日に至っている。

「夕日」という、どこにでもありふれた自然現象を素材としたまちづくりの試みに、初めは冷やかだつた周囲の目も、次第に暖かさを増し、次に紹介する「夕日に魅せられた町」へと変貌しはじめている。

❖「夕焼けプラットホームコンサート」

日本全国には夕日の美しいまちが幾つもあるだろうが、夕日を双海町のキャラクターイメージに育て上げた功績は、何と言っても「夕焼けプラットホームコンサート」であろう。

列車が発着するプラットホームを舞台にした奇抜さもさることながら、刻々と彩りを変えて诗情豊かに沈みゆく夕日・夕焼けの美しさは、音楽の力を借りて、訪れた人々の心に深い感動を与えてくれる。天気の設定する初秋九月の第一土曜日には、無料の気安さも手伝って町内外から約二千人の参加



者があり、無人の下灘駅は昭和十年の開業当時を彷彿とさせる賑わいを見せている。

四年連続メインゲストとして出演した下田逸郎氏が作詞作曲、下灘中学校生徒が歌った「双海恋唄」のカセットテープも好評を博すなど、毎年何かと話題の多いコンサートである。

❖「夕日・夕焼けフォトコンテスト」

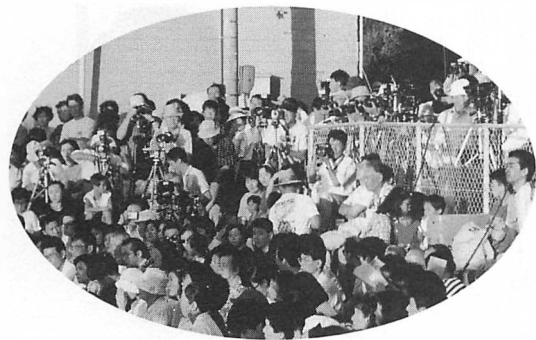
夕日・夕焼けは自然界が生み出す風景絵画である。その風景を写真にして残そうと平成三年度から「夕日・夕焼けフォトコンテスト」



を実施している。毎回百点を超える応募の中から優秀作品数点を選び、フジグラン松山等で写真展を試みたり、絵ハガキにして町をPRするなど、まちづくりに役立っている。これらの作品はストックされて、将来にわたって活用が図られる予定である。

❖町のイメージアップCI戦略

町のイメージアップCI戦略の一環として、平成四年度にシンボルマーク及びキャッチフレーズを募集した。全国からシンボルマー



ク九百点余、キャッチフレーズ二千五百点余と、予想を上回る応募があり、夕日にちなんだ作品が約八割を占める中、キャッチフレーズは「しずむ夕日が立ちどまる町…双海町」と決定した。

また、平成五年三月に開通式を迎えた海岸国道378号線の愛称募集（長浜町との共同事業）にも、全国から三千三百件もの応募があり、審査の結果「夕やけこやけライン」と命名された。

国道沿いの各集落を示すランドマークが取り付けられたり、名刺、

ハガキ、封筒、懸垂幕とあらゆる分野で夕日のCI戦略が息づき始めている。

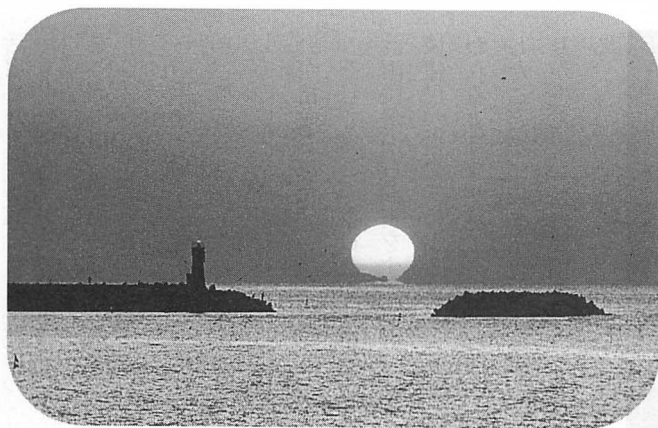
❖「夕日のミュージアム」建設

これまで双海町は、夕日に関するソフト事業を約八年間地道に実施してきたが、その集大成として「なぎさの産業交流センター」、「イベント広場」、「人工砂浜」、「駐車場」等を有するシーサイド公園内に「夕日のミュージアム」を建設中である。

夕日のミュージアムは、夕日を自然科学、芸術、民俗学等色々な切り口から楽しく体験学習できるような工夫されており、夕日の回廊のある屋上には、日時計や夕日占いもできるような計画されており、早くも若いカップルがたくさん訪れるなど、熱い期待が寄せられている。

風、水、土、海、空気、太陽、花などの自然を活かして、地域の顔をつくることは、いざやってみると簡単なようで、容易なことではない。自然から学び、自然を知り、自然と共生する心を持たねば、

それはたちまち不自然となる。自然環境の破壊されたところでは、自然の風音も聞こえないし、香りもしない。ましてや自然も味方しないだろう。自然に逆らって生きてきた私たちは、もうそろそろゆったりとした自然の流れに身を任せて、まちづくりをする時代になったことに気がつくべきだと思うのだが……。



第8回

地域づくり

琵琶湖
近江八幡市
愛東町
甲良町
長浜市
高月町



生きがいを求めて……

躍進する

せせらぎ遊園のまち

PART 2

甲良町

◆地域の概要

滋賀県甲良町は、滋賀県の東北



企画財政課長

野瀬喜久男さん

部に位置し、犬上川流域扇状地帯

に甲良親王が開いたこの土地は、

平安時代には、「甲良の荘」とい

う荘園が営まれていたそうである。

また、近江守護職佐々木道登(バ

サラ大名)の居城があり、日光東

照宮の寛永大造宮の大棟梁甲良豊

後守宗広や、名築城家藤堂高虎を

輩出し、江戸時代以降は、「甲良米」

の産地として評判が高かった所で

ある。

総面積は、一三・六六km²で、東

西五・三二km、南北五・一五kmの

平地農村である。

同町は、扇状地の砂礫土壌や犬

上川の流域が小さいことが災いし

て、干ばつになると水争いが絶え

ず、ついには、昭和七年の水騒動

が契機となって、貯水量四百五十

万トンの犬上ダムが建設された。

以来、安定した用水供給のもと、

犬上川から導水する用水路網に

沿って十三の集落が形成され、農

業用水と生活用水に多目的に利用

されるなど、人々の暮らしと深い

かわりを持ちながら大切に使用

されてきたそうである。

◆まちづくりの歩み

昭和五十六年、大区画は場整備

事業に伴う、かんがい排水事業に

よる地下パイプライン構想が持ち

上がり、住民から「従来の農村景

観が様変わりし、水が遠ざかるの

では」と心配する声が高まってき

たため、町は環境検討委員会を設

け、環境アセスメントを実施した。

その結果、昭和六十年三月に「甲

良町農村景観形成構想」―水と緑

あふれる農村を守り育てるため

―がまとめられ、その実現に向け

て住民のまちづくり運動が本格的

に展開する切っ掛けとなった。

平成二年六月、「甲良町夢現計

画」(総合計画)において、「せせ

らぎ遊園構想」(基本計画)を打

ち出し、「ふるさと創生資金」を

活用した集落事業として、「花いっ
ぱい運動」や「集落の顔づくり事
業」の一律百万円の交付事業を行
ったことで、むらの将来設計は自
らの手でという機運が高まってい
き、集落づくり実践の中核組織と
しての住民主体のむらづくり委員
会が結成された。

そして、この委員会が、事業の
計画段階から参画をする一方、地
域住民が自発的にふるさとにか
われるようなサポート役を行政が
したことが、住民主体のまちづく
りが進んでいった要因と考えられ
る。





横堰の川

また、同町では、住民が考えた計画を有利な補助制度を活用しながら実現させようと、農水省の「農業水利施設高度利用事業」「水環境整備事業」と自治省の「地域づくり推進事業」を上手く活用して、集落内は従来通りの水路に、また、各集落の入り口の分水点には、自然圧を利用したユニークな十四カ所の親水公園をつくらうという整備事業がスタートした。

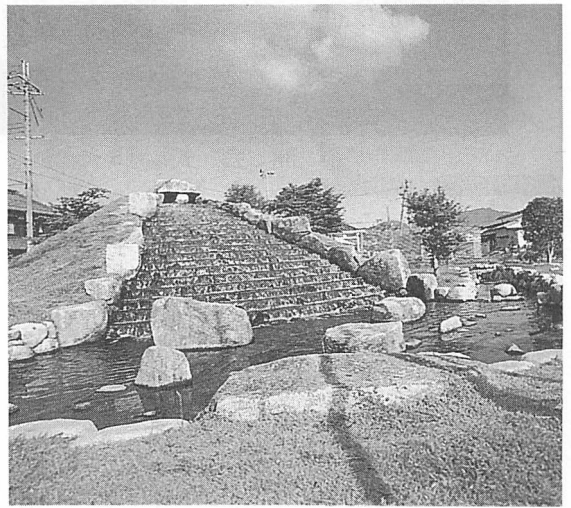
この他にも、ほ場整備区内の樹林を残し、虫たちの森として三カ所を保存しているほか、ふるさと

の道路景観整備も六路線が完成している。

◆むらづくり委員会 って…

甲良町企画財政課長野瀬喜久男氏は「当初、むらづくり委員会でも、他人まかせで主体性が生まれてこない委員会もあった。しかし、学習を重ね、ふるさと

の良さを知る中で役員が結束して自分たちで、石積みをしたり、東屋を作ったりして、まさに、手作りの公園が完成した。そして、行政もこの住民の動きを手本にして、全集落にこの運動を広めようと様々な働きかけを行った結果、現在では全集落にむらづくり委員会が結成されている」と言われ、さらに、むらづくり委員会の中で行っている集落点検地図については、「知っていて知らないのが自分の町」、そこで、まちの地図に、水辺はあるのかないのかなどの現状を書き入れ、何が足りないのか



小学生のアイデアを活かした

「ピエロ」の滝、

づくりの定着を目指している。

この他にも、兼業農家が増え、農業者の高齢化が進む中、機械の共同利用等の「集落営農ビジョン」を実施しているそうである。

また、住民と行政の役割分担を明確にするとともに、むらづくり委員会と行政に対しての専門家・知識人のアドバイスとが、上手く噛み合うよう取り組まれてきた甲良町の素晴らしいまちづくりの一端を学ぶことができたような気がした。

先人たちが残してくれたふるさとの風景・慣習等の宝ものが、利便性や物・金を追求するあまりに失われつつあることを憂い、一人ひとりが語り・学び・行動していくことで、幾たびの出会いと感動を積み重ねながら、行政と住民の絆が深められるのだろう。

今後とも、ふるさとの良さを再発見し、「日本一のむらづくり」を進める甲良町を見つめていきたいと思う。

(研究員 尾崎 弘典)

などの問題を分析し、事業の展開を図っていった。その過程において、仲間とのふれあいを通して素晴らしいコミュニティが生まれてきたように思う」とも語られた。そして、「同時に、むらづくり委員会では、景観シンポジウム等の学習活動も地道に行っていたことが、住民主体のまちづくりに結びついたのではないか」と言われた。

◆研修を終えて…

甲良町では、現在は、各むら・くり委員会・まちづくりに志のある方を対象に、「せせらぎ夢現塾」をスタートさせ、住民主導のまち

今 地方の熱意が風となる

感じてください 緑の風を

'93地域づくり西日本交流会議日田玖珠大会

研究員 石 家 清

去る十月十四、十五日、大分県日田市を主会場に「地域づくり西日本交流会議日田玖珠大会」が開かれた。この大会は、全国各地域の活動家・実践家、地域住民等が積極的に交流を行い、それぞれの地域で新しい風を巻き起こし、誇りを持って住めるまち・むらづくりを進めようと国土庁と開催地が主催し、開催しているもの。



「感じてください 緑の風を」をテーマに、地域の特性としての緑を若い力と位置付け、「風」をキーワードとして活性化の方策を探ろうと、日田玖珠地域の八市町村で九つの分科会やパネルディスカッションなど多くの行事があり、参加者間で学び・ふれあいの交流が行われた。また、全国に先駆けてむらおこし運動に取り組んだ大分県での開催とあって、開催地の熱意と、参加者の熱意を感じる大会の雰囲気であった。ここで、その概要を報告します。

開 会 式

「一村一風運動」は、地域独自の文化を活かし、特色のある産物、音楽、スポーツなどを通して、地域独自の風を吹かせ、まちに独特の風格を持たせようというものである。これからは、近隣の市町村の間で地域の連携を深め、それぞれの機能を連結し、交流を進めていかなければならない。そのためには、

◆基調講演「平松守彦大分県知事」

『風は目に見えないし手に取れないが、風が起ると確実に物事が起こる。家風、校風、社風などの風があるが、まちには市風、町風、村風がある。それを外から感じるものにしていかなければならない。』

地域を活性化していくためには、一村一品のような産物づくりだけではなく、文化が極めて大切となる。文化とは生活の中に根差すものであり、カルチャー（文化）という言葉は、カルチ（土地を耕す）からきている。つまり、「地域」なくしては文化はないし、「地域」を離れて音楽はなく、酒もない。

「ハブll hub」を形成する交通網の整備を進めていくことが必要である」と語られた。

◆分科会

―水と緑、自然の恵みを活かして―

私は、上津江村で開かれた「水と緑、自然の恵みを活かして」というテーマの第九分科会に参加した。

この日田地域は、林業を基幹産業とした山間地域であり、筑後川の源流として豊富な水資源の生産地となっている。平成三年の19号台風では、二千万本の風倒木に見舞われる大きな被害が出て、日田林業の大きな痛手となっている。この分科会は、水と水を育む森林の大切さを、上流域と下流域の人が共に考え、今後の森林のあるべき姿と水資源の確保について考えていくものであった。

パネラーの話の中で、野鳥保護の立場から、「日田地域には鳥の種類が少なく、山はあるが感動を覚えない。自然林が少なくなり動



分科会の様子

物の生態系も変わってきたのではない。水の問題も森林の生態系と切り離しては考えられず、これから林業と自然との共存について考える必要がある。

また、下流の日田市に住む人からは、「自分たちは水環境を守るために何ができるのかを考え、合併浄化槽などの問題について取り組んでいる。住民運動として民意を盛り上げるようがんばっている」。

そして、林業従事者は、「林業後継者の問題もさることながら、先の19号台風の被害が放置されて

いる所もあり、保水能力にもかかわってくるのだが、自分たちの力だけではどうにもならない。下流の人たちの協力が望まれる」等、活発な意見が交換された。

こうしたやり取りの後、コーディネーターが、「まだ一般的には水の供給に対する関心が薄い。そのため、下流域と上流域の交流が不可欠であり、PRも必要。森林を所有権と利用権とに分けて考え、下流の人に利用権を与えていくことが必要ではないか。森林は林業従事者の生活を支える役割もあり、自然環境との共存も考えなければならぬ」とまとめられた。

このような話の中から、水を育む森林を守るということは、あるべき自然と、それにかかわる人間の生活、経済活動が絡み合う複雑な問題であることを考えさせられた。一方で、これまで人により森の管理がされていたものが、山村の過疎等により、今後はできなくなるという現実、このことに真剣に対処することが今まさに望まれていると感じた。

■パネルディスカッション

―地域づくりの風―

ここでは、この大会のキーワードである「風」を取り上げ、「地域づくりの風」ということについて、パネラーからそれぞれの意見や提言がなされた。

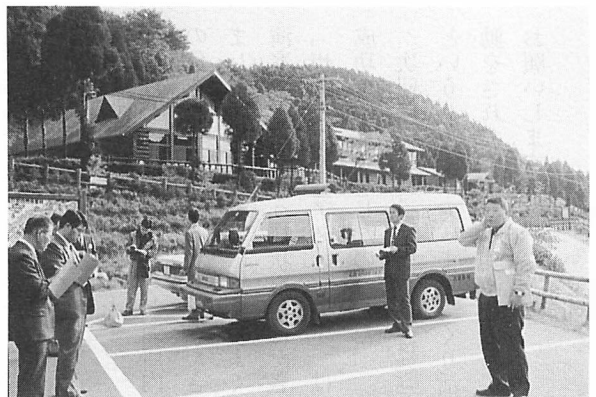
「風とは何か」「今風は感じられるのか」ということが論じられたが、時代を吹く風が変わってきた中、地域に風を起こすための一つとして、「造風機をつくる」ということが提案された。施設を一体的に整備し、農村でも都市的開放を体験できるようにすることにより、人々がふれあい、ボルテージが上がリ、風につながるのではないかといいものである。

また、「風のほかに地域づくりに必要なものは「光」であり、文化によるまちづくりしかない。生活文化、行政の文化化により風格をつくっていくことが重要。そして、これからの地域づくりでは、文化戦略がコアになるだろう」とまとめられた。

◆おわりに

地域づくりは、紙を一枚一枚重ね合わせるように、歴史を一つひとつ積み重ねることといわれる。私たちはその責任を負いながら進んでいかなければならない。そのためにも、「自分の地域をどのようになりたいのか、しっかりと哲学を持つ必要があると強く感じた。

この大会は、次年度には宇和島広域圏で開催されることになっており、愛媛から地域づくりの風が全国に伝えられることだろう。



熱心にメモをとる参加者
(上津江村・フィッシングパークにて)

ザイラー・ピアノ・デュオ

土居町
荻田 清秀



申しますのは、条件の一つに「話題性のある場所」

昨年の十一月十五日は、土居町にとって記念すべき日となりました。今はほとんど使用されていない百坪あまりの葉たばこ取扱所跡地の倉庫が、七百五十人の観客で満たされました。「ザイラー・ピアノ・デュオ大関座布団コンサート」が開かれたのです。

このコンサートは、酒造会社の大関が音楽ホールのない町村にザイラー夫妻のピアノの連弾を聴いてもらおうと企画したものです。そして、これを招致したのが、昨年の正月に発足した「生の音楽を聴く会」のメンバーです。

私たちがこの企画を知ったのは、昨年五月の愛媛新聞の記事でした。早速申し込もうということになった、会場探しから始めました。と

ということがありましたので、裏山を山城に似せた割烹料理店の跡地や、寺の大広間などがまず候補に挙がりましたが、どちらも収容人数の点で外さざるを得ませんでした。結果的に数百人を収容できるということから、葉たばこ取扱所跡地の倉庫に落ち着きました。



会場の写真を添えて申し込みましたが、話題性も少なく、ただ広いばかりのコンサートクリート床の廃屋に近い建物が、全国で六カ所の内の一つに選ばれようとは、正直だれも思っていないでした。俗に言う「宝くじは買わなきゃ当たらない」という気持ちです。

しかし、申し込んでみると宝くじの抽選日が気になるのと同様、当落の通知がいつになるのか、気が気ではありません。

だれかれともなく、「こりゃあだめだったなあ」と言い始めた八月のある日のこと、「土居町に決定した」との電話連絡を受けた時は、みんなの熱意が天に通じたうれしさで一杯でした。

会場準備の手始めは、コンクリートの床に敷き詰める段ボールの確保です。幸いにも、地元の段ボール箱を製造している工場から、一畳ほどの広さの折り目のない段ボールを、不良品とすることで数百枚も提供していただきました。

次はチケットの販売ですが、一カ月近く前に新聞各社が、このコンサートを大きく記事に取り上げて下さったお陰で、五百円のチケットは発売後十日ほどで売り切れるという盛況ぶりでした。

当日は、午後七時の開演にもかかわらず、午後六時前から列ができて始まりました。一人ひとりが座布団を抱えています。こちらの心配は、全員の方に座っていただけのように誘導することでしたが、皆さんの協力で混乱もなく少し余裕ができるほどでした。

開演時間が来ると、ザイラー夫妻が客席の狭い通路から登場。四斗樽の鏡割りは、周りの人にしぶきが飛びかかります。それから、素晴らしい演奏の連続です。誌面でお伝えできないのが残念です。休憩時間には、酒やクッキーを配りました。小さな子供たちも座を立とうとはしません。マナーも素晴らしいコンサートでした。

打ち上げは、役員たちと瀬戸内の魚をたつぷり味わっていただきました。後日、本当に気持ちよく演奏できたという礼状をいただき、「ザイラー・ピアノ・デュオ」は、成功裡に幕を閉じたのでした。

今回は、伊予三島市の「秋桜塾」というグループで、まちづくり活動をされている青木美津代さんをお願いしました。

後継者の結婚

広見町
水野マスミ



ものではなく、全
県下、いや全国の
まち・むらが抱え
ている難題ではあ
るまいか。ちなみ

に小さいわが地区の現状にスポッ
トを当ててみると、十四戸四十三
人が、国道441号を挟んだ田園
の中で、穏やかな日々を送ってい

区へ嫁いで行くのでは?……と考
え、暗たんたる気持ちになるのは
私ひとりであろうか。ある人にこ
の話をすると、「二十年も先のこ
とが分かるもんですか。馬鹿みた
い」と一笑に付されてしまった。
しかし、私には笑い飛ばしてしま
えない何かが残るのである。

新年を迎えて間もなく、町の広
報紙「ひろみ」が配布された。町
長さんの「年頭にあたって」に日
がいく。平成五年度の重要施策七
項目に対する進展状況が示されて
いる。福祉施設の問題、総合公園
の早期完成、上水道、水源確保と
工事着工、道路交通網の整備促進、
河川の整備、産業政策等々である。
進展状況は、「それぞれに順次着
工進展しております。…完 成す
る予定です。…大きな成果をあ
げました。……」と結ばれている。

る。しかし、四十三人の住人も、
五十歳以上が六三パーセントを占
め、子どもは、平成六年一月五日
に生まれた赤ちゃんを入れて四人
だけである。もちろん小・中学生、
高校生は皆無。また二十年前には、
百パーセント近くあった三世代同
居も、今では一五パーセントを割
る淋しさである。二十代後半から
三十代、四十代の独身者もかなり
多く、後継者の結婚問題は日増し
にその深刻さを増している。

二十年前の活気と和と喜びに満
ちていた地区を思い起こす時、あ
のそれぞれの家族を、地区を
くつたのは誰だったのだろうと考
える。それは先人たちであり、彼
らの家を、地区を永遠のものとす
る為の血のにじむような努力の積
み重ねがあったればこそではある
まいか。

しかし、「ただ一点、重点として
おります後継者の嫁不足の解消の
問題は、実績をあげることができ
得なかったことを反省いたしてお
ります」と結ばれている。

現在のままで、二十年後のわが
地区を想定してみる五、十 歳以
上の人が九〇パーセント、その内
八十歳以上が五〇パーセントを占
めることになる。現在の四人の幼
児は、女の子が三人なので、他地

あれから二十年、バトンを受け
とった私たちは、どれだけの 力
をしただろう。結婚問題然りであ
る。ほとんどの親が「自由」の名
のもとに、家族崩壊、地区崩壊に
不安を持ちながらも逃げの姿勢し
かとれないでいる。

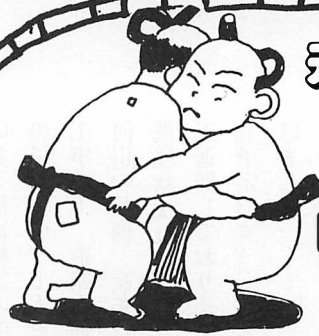
「地域づくりは人づくり」と言
われるが、人づくりの根源は家庭
にあると思う。家庭づくりこそ地

域づくりの第一歩ではあるまいか。
今年は国際家族年でもある。手づ
くりの家族づくりに、それぞれの
立場で挑戦したいものである。後
継者の嫁不足の解消を夢みつっ”
次回は、宇和島市の福田年子様
にお願いします。



元気印 レポート

■■のマンチェスター
保内町



保内まちなみ倶楽部

岡崎 直司

さて、問題です。「保内」という町について、知っていることを述べよ。

さあ大変だ。こんなのが入試の問題に出たとしたら、みんな頭を抱えるだろうなあ。ひよつとしたら、場所はおろか町名の読み方すら分からない人もいたりして。

そんな私たちの町は、「ほないちよう」といいます。「ほないに難しい読み方やないけん覚えとい

てや」。保内を一言で言えば、西洋文化の香る町。佐田岬半島の付け根に位置し、江戸から明治、大正と海運、木ろう、鉱山、紡績、金融などで栄え、地域経済のオピニオンリーダーとなる。宇和紡績の設立は四国で初の電灯を灯し、また第二十九国立銀行が県内で最初に設置されたのも保内町である。そう、いわば四国のマンチェスターと言っているのかも知れない。

倶楽部紹介

さて、前置きはともかく、私たち「保内まちなみ倶楽部」の紹介に移ります。

構成メンバーは約十五人。基本的に、「入ルヲ歓迎出ルヲ拒マズ」

でやっているの、特別な会則もなく、フアジリーな会です。世間ではこれを「エエカゲン」と言っ

たりしますが、想いは一つ。故郷の魅力をアピールしたいということです。

ただ、会費だけはきちんと必要時に徴収しております。会員の職種も、経営者あり、公務員、会社



員等様々です。それだけに集まるのが大変ですが、いざという時には準構成員の協力もあり、色気のないのが玉にキズということを除けば、楽しく活動しております。

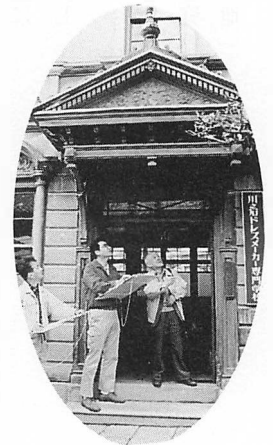
初会合は一九九一年二月、ちょうど三年前のことです。当初は「川之石の景観を考える会」ということで発足。ところが、年末には早速、会の存在を試されるような出来事がありました。

あたらしや解体問題

江戸末期に建てられた「あたらしや」という商家建築物が取り壊されるというのです。すぐに所有者に掛け

合って、せめて実測調査による図面記録を残したい旨要望し、解体を少し延期してもらいました。

しかし、我々は素人集団であるため、結局この超多忙期に、地元八西建築士会有志の方々や犬伏武彦氏（氏家調査グループ「茅舎」代表）らの全面的な協力を仰ぐこととな



りました。残念ながら現物は消えてしまいましたが、約百三十年前の商家建築である「あたらしや」の細部写真と図面記録は何とか残せ、保内町社会教育課に資料を提供することができました。

保内まちなみ倶楽部誕生

翌一九九二年には、「あたらしや」が川之石の地区外だったことから、会の名称を「保内まちなみ倶楽部」と改称し、現在に至っています。

また、かねてより依頼していた坂田泉広島工業大学建築学科教授が来町。旧白石和太郎邸洋館（現ドレメ）の実測調査に当たっていただきました。現在、我が倶楽部で使用している名刺は、この時の立面図を使わせてもらっています。秋には、保内町庁舎ロビーにおいて、「あたらしや」の解体材及びこれら記録図面類を中心に、「町

並ウォッチング資料展』を開催。

その際、アンケートにより来場者の意識調査をし、記入者には町並写真のポストカードをサービスしました。

「緩れんが」について

明けて一九九三年は、九一年からの懸案事項であった「緩れんが利活用運動」一色の年となりました。まず、緩れんがについて説明しておきます。

明治期、保内は大峰鉾山（雨井）

を中心として銅鉾業で栄えていました。保内町の沖合約五km、宇和海上に浮かぶ佐島（八幡浜市）で、明治二十六年から大正九年まで佐島製錬所が操業していました。ここでは銅製錬の際、銅分抽出後の鉾滓（こうさい）を利用して二次製品の鉾滓れんがというものが作られていました。これを「緩れんが」といって（地元では「佐島れんが」とも呼ぶ）、鋳物の塊で非常に重いものです。因に普通のレンガサイズで五kg。これらは主に建設資材として、建物の基礎や階段、塀などに使われ、佐田岬半島地域では気を付けて見えていくと、あちらこちらでよく見

かけることができます。しかし、ほとんどは無用の長物と化しており、佐島には長い間うち捨てられた緩れんががゴロゴロしていました。

さて、これらを一堂に集めて、新しく活用できないか、そして、歴史を現代に蘇らせようと考えた訳です。しかし、言うは易く行なうは難し。「エライ事言うてしもうた……」、が後の祭り。前に進むしかありません。

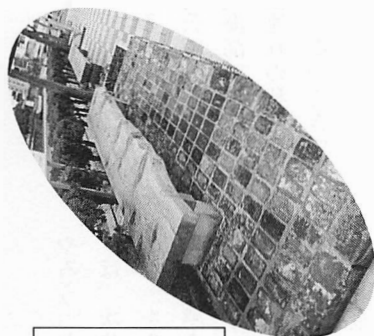
まず、集められるだけとにかく集める。佐島の所有者にも了解をもらわないといけない。要望書を出している愛媛銀行からも早くOKの返事を取り付けねばと難問が山積み。そんな折、保内ショッピングセンターの会長さんから「ウチも希望した

い」旨の連絡があり、これは有難い、願ったり叶ったりだ。また、運搬はどうするかで佐島へも何度も足を運

び、諸々、すったもんだの末、各方面にご迷惑をかけて、愛媛銀行、保内SCの工事が共に完成。歴史がここに蘇ったのです。

考えてみれば、多くの幸運に恵まれました。①保内に鉾山の歴史（緩）があつた事②佐島所有者の理解が得られた事③愛媛銀行、保内SC共に好意的に協力いただいた事④某地元建設会社の運搬船が使えた事⑤そして何より汗水流して動くだけの仲間（人材）がいた事。これらのどの一つが欠けていても実現は不可能でした。

保内まちなみ倶楽部は、これからも周辺に多大な迷惑をかけつつ、それが結果として迷惑にならないような、そんな地道な活動を続けて行きたいと考えています。



倶楽部名刺



保内まちなみ倶楽部

伊藤 康造
〒777-1
西条市保内町2-51-236-7
☎0894-36-0164

保内まちなみ倶楽部年表

1994	1993	1992	1991
12 赤煉瓦ネットワーク（当倶楽部入会） 赤煉瓦博物館（舞鶴）へ展示用緩れんが（5kg）を送る 日本ナショナルトラストメンバー来町。町内案内及び交流 愛媛新聞に「保内まちなみ倶楽部」の紹介記事 NHKイブニングネットワークにて、「保内まちなみ倶楽部」の活動紹介放映	10 11 保内町並ウォッチング資料展を庁舎ロビーにて開催 1 3 町内外から「緩れんが」収集 佐島所有者（奈良市在住）に緩れんがの提供を交渉 佐島での緩れんが収集活動（約7t）及び運搬 保内ショッピングセンター改築●PEN「緩れんがベンチ」完成 第17回全国町並ゼミ川越市（埼玉県）へ参加 9 愛媛銀行川之石支店移転新築OPEN「緩れんが」完成「保内まちなみ瓦版」第1号発行 10 赤煉瓦ネットワーク内藤恒平氏来町 11 赤煉瓦ネットワーク（当倶楽部入会） 赤煉瓦博物館（舞鶴）へ展示用緩れんが（5kg）を送る 日本ナショナルトラストメンバー来町。町内案内及び交流 愛媛新聞に「保内まちなみ倶楽部」の紹介記事 NHKイブニングネットワークにて、「保内まちなみ倶楽部」の活動紹介放映	12 川之石の景観を考える会」発足 愛媛銀行川之石支店移転新築に際し「緩れんが」使用についての要望書」提出 あたらしや解体に際し、八西建築士会有志の協力により実測調査 「保内まちなみ倶楽部」に名称変更 3 坂田東広島工業大学教授、旧白石和太郎邸洋館の実測調査に来町 第16回全国町並ゼミ吉井町（福岡県）へ参加 倶楽部会員名刺作成 藤森昭信建築探偵（東京大学助教授、愛媛県ふるさと再発見ウォッチングに來町 保内町並ウォッチング資料展を庁舎ロビーにて開催 10 11 保内町並ウォッチング資料展を庁舎ロビーにて開催 1 3 町内外から「緩れんが」収集 佐島所有者（奈良市在住）に緩れんがの提供を交渉 佐島での緩れんが収集活動（約7t）及び運搬 保内ショッピングセンター改築●PEN「緩れんがベンチ」完成 第17回全国町並ゼミ川越市（埼玉県）へ参加 9 愛媛銀行川之石支店移転新築OPEN「緩れんが」完成「保内まちなみ瓦版」第1号発行 10 赤煉瓦ネットワーク内藤恒平氏来町 11 赤煉瓦ネットワーク（当倶楽部入会） 赤煉瓦博物館（舞鶴）へ展示用緩れんが（5kg）を送る 日本ナショナルトラストメンバー来町。町内案内及び交流 愛媛新聞に「保内まちなみ倶楽部」の紹介記事 NHKイブニングネットワークにて、「保内まちなみ倶楽部」の活動紹介放映	6 2 「川之石の景観を考える会」発足 愛媛銀行川之石支店移転新築に際し「緩れんが」使用についての要望書」提出 あたらしや解体に際し、八西建築士会有志の協力により実測調査 「保内まちなみ倶楽部」に名称変更 3 坂田東広島工業大学教授、旧白石和太郎邸洋館の実測調査に來町 第16回全国町並ゼミ吉井町（福岡県）へ参加 倶楽部会員名刺作成 藤森昭信建築探偵（東京大学助教授、愛媛県ふるさと再発見ウォッチングに來町 保内町並ウォッチング資料展を庁舎ロビーにて開催 10 11 保内町並ウォッチング資料展を庁舎ロビーにて開催 1 3 町内外から「緩れんが」収集 佐島所有者（奈良市在住）に緩れんがの提供を交渉 佐島での緩れんが収集活動（約7t）及び運搬 保内ショッピングセンター改築●PEN「緩れんがベンチ」完成 第17回全国町並ゼミ川越市（埼玉県）へ参加 9 愛媛銀行川之石支店移転新築OPEN「緩れんが」完成「保内まちなみ瓦版」第1号発行 10 赤煉瓦ネットワーク内藤恒平氏来町 11 赤煉瓦ネットワーク（当倶楽部入会） 赤煉瓦博物館（舞鶴）へ展示用緩れんが（5kg）を送る 日本ナショナルトラストメンバー来町。町内案内及び交流 愛媛新聞に「保内まちなみ倶楽部」の紹介記事 NHKイブニングネットワークにて、「保内まちなみ倶楽部」の活動紹介放映



■はじめに

県都松山市から北へ国道196号線を車で約一時間、四国の西北端高縄半島の西に位置する大西町は、造船とタオルの町として知られる。同町では、日本最古級の前方後円墳といわれる「妙見山古墳」など多くの歴史的遺産が残っており、現在、この古墳を中心とした都市公園「藤山健康文化公園」の

整備が進められている。

また、「海と緑の田園都市」を将来目標として、その一つの核となる「星の浦海滨公園」を国道196号線沿いの臨海部に整備しており、若者や家族連れの利用も増え、同町の新名所となってきた。

今回は、この星の浦海滨公園を利用して、手づくりのイベントを実施しているまちづくりグループ「大西町夢海道196風おこし」の田坂英治さんをお訪ねし、活動状況などについてお話を伺った。田坂さんは、星の浦海滨公園の一角で「ハーフタイム」という喫茶店を経営されているが、カモメのえ付けに成功した喫茶店として新聞・テレビで報道され、近所でも評判になっている。

当日は、業務でご多忙中であつたにもかかわらず、快く取材に応じていただいた。

■グループ結成の経緯

「誰にも束縛されず、自分たちで、好きなことを、とにかく何か

やろう」と、結成された同グループは、次代を担う子供たちが「らしさ」を失いつつあるということに危機感を抱き、子供たちを巻き込んだイベントを手掛けたというところから、①批判厳禁・連想重視の原則、②自由奔放の原則、③質より量の原則（とにかくやってみる）という三原則のもと、有志の賛同を得て平成五年四月に結成された。

グループ名の「大西町夢海道196風おこし」は、何か夢を持つてやりたいということから名付けたという。

結成に当たっては、町内の各団体に働きかけを行ったがなかなか



田坂 英二さん



大道芸のイベント
「ハロー大西町夢海道星の浦浜公園」

理解してもらえず、大変苦労したとのこと。しかし、会合等に出席しては根気強く趣旨説明を繰り返した結果、平成五年六月十三日に開催された、同グループの記念すべき第一回目のイベント「ハロー大西町夢海道星の浦浜公園」では、各団体の協力も得られ会場には多数の出店が並ぶなど、盛況裡に終了したという。

■主な活動内容

月に一度は、実質会員四名で定例会を持ち、「小さなものでもいいから毎月イベントを実施しよう」を合言葉に、夜店（七月）、講演会（八月）、たそがれコンサート（九月）、シーサイドコンサート（十二月）などを開催している。

「大西町の良さを知ってもらいたい。星の浦海浜公園に沢山の人が来てもらいたい」ということで開催した「ハロー大西町夢海道星の浦浜公園」は、子供も親も楽しめるものということから、子供たちの意見を参考にして昔懐かしい大道芸のイベントを実施し、約二千人もの観客で賑わった。

しかし、イベント開催に当たっては、ポスター・有線放送による案内のみで、個人別の案内は一切行なわなかったため、開会直前までどれくらいの参加者になるか予想もつかず不安だったとのこと。それだけに、雨天という悪条件にもかかわらず二千人もの方々が集まった第一回目のイベントは、町内の一大イベントとして、みんなに喜んでいただいたのが大変嬉し

かったという。

ただ、協力者は多いものの、手づくりのイベントということもあって、企画・準備・当日の運営とやらねばならないことが多く、少人数の会員では苦勞も少なくないという。グループに加って中心的に活動してくれる人がなかなかおらず、会員が増えてこないことが、現在の最大の悩みとのこと。また、イベント開催にかかる経費も、町の補助のほかは出演者のボ



潮だまりが親水の間になっている
「星の浦海浜公園」

ランテアに頼るしかないという状況であり、このことも悩みの一つであるという。

■今後の取組み

「大西町は、『ドックの町』として有名だが、ほかにも良いところが沢山あるのに余り知られていない。通過するだけの町になってしまっている。砂浜の海岸線は美しく、多くの自然に恵まれている。夢の一杯ある町。イベントを通して、そんな大西町の良さを多くの人に知ってもらい、ぜひ立ち寄ってもらえる場所にしたい……」と語る田坂さんは、次年度のイベントとして、新たに毎月第3日曜日に「ふれあい市」を開こうと準備中である。

また、近隣の五カ町村のまちづくりグループに、交流を目的として「風おこし」のサミットを開催しようとして働きかけていこうという計画もあるという。

最後に、「失敗を恐れず、とにかく自分たちで我武者羅にやってみるということが大事であり、そ

れが長続きの秘訣では……」と、話を締めくくられたが、『たそがれコンサート』の今年度の開催も九月十七日に決定しているとのことであり、「やれば出来るという自信が付いた」という同グループの今後の活動がとても楽しみである。

（取材／研究員 松岡正範）



「ハロー大西町夢海道たそがれコンサート」

見管 スイスを歩いた2週間／見想録(X)

【実践的改訂戦略のプロセス】 宮本俊一

◇初印象／なんだか懐かしい街

緊張がやや緩んだのは、バーン
ホーフ通りまで来てからだ。「チ
ューリッヒ・クローテン空港着
陸」の案内で、「いよいよスイス…」
と一瞬に緊張。ガイドブックの空
港ターミナル図が頭に浮かび、そ
の各関門（廊下の左右屈折やエレ
ベーター・入管・税関等）のクリ
アに懸命で、福留所長の出迎えに
も上の空。地下ホームから列車で
チューリッヒ中央駅へ、「ここに
に両替所が…」とキョロつく調子。

すっかり暮れた駅前広場で、
黒々と広がる荘重な中央駅ビルと
「スイスの鉄道王」エッシャーの
銅像にチラリと流し目し、「この
近所にベスタロッチの銅像がある
ハズ…」と思ったのが唯一のゆと
り…私にしては上出来な初意識。
バーンホーフ通りの市電停留所
で切符の買い方を習い、何とか自
動販売機を操作。一安心の気分

街を眺め、「えっ！ ここがスイ
ス…？」と、なんだか懐かしい感
じに…肩の力が抜け、異国に來た
とは思えない安らぎを覚える。

なぜだろう…、あつ自動車が行
っていない！ 何と樹木ばかりの
街！街のビルがどれも傾合いの高
さ…！と思うと、どこか戦前の日
本の都会にいるみたい。なんでも
この大通りは、チューリッヒ湖畔
まで一km余りのヨーロッパでも代
表的な洗練された高級ショッピング
街だとか…。賑やかな中にも落
ち着きがあり、ウィンドウ・
ショッピングだけでも楽しめるそ
うだ。

市電は駅裏へ回る…リマト川左
岸沿いに走り、ヴァルヒエ橋を渡
ると閑静な坂道を左に登る。まる
で戦前の松山を市電で走る感。ホ
テルは小ぢんまりと可愛い。フロ
ントには年配の美人、アットホー
ムな応対だがビジネスライク。部

屋は古風な住宅改装という感じで、
簡素というより質素。でも最低機
能は完備。私が希うスイスの拠点
には最適。

◇これが／地域づくりの根っこ

この初印象は、その後…町でも
田舎でも、どんな場所でも裏切ら
れなかった。思い込み屋の私の独
り善がり？ だが後日、前掲シー
クフリード教授の一文を発見。

『国境を越えスイスに入れば、
総てがもつと清潔になり、よりよ
く整頓され、人びととはもつと親切
で、丁寧で、如才がなく、またく
つろいだ感じを受ける。まるで別
世界に入った気がする。この世界
では、法律がよりよく守られ、規
律が尊重されている。その上ここ
では、人間に対して、より多くの
社会福祉が行き渡っている。そこ
に政治の主眼が置かれているので
あって、一般的な主義とか原則と
かは殆ど議論されない…』（笹本
駿二著／『私のスイス案内』）
なるほど、スイスの人びとの「暮
らし」と「社会システム」が根っ
こで、人間らしい暮らしを希うす

べての人に、懐かしさを抱かせる
地域を創らせた…かと想う。しか
し、同教授がそうしたスイス人の
熱源だと言う「実践的精神」と「自
由主義」の内『自由主義』の元素は、
これまで私が述べてきたスイス史
管見の中では、未だ人びとの意識
としては未分化。

◇本質は／時代逆行の同盟規約

ともあれ一八一三年暮、ナポレ
オンの没落が決定的になるやオー
ストリアとロシアの軍勢が、スイ
スを通りフランスに侵入する。ペ
ルンではこれを機に、旧支配貴族
が政権を奪い、共和国決定の一切
を無効とした。それに続き…数邦
が旧制度を復活するが、スイス全
体でも調停条約は問題なので、同
年十二月二十九日、旧十三邦の内
十邦が集り、調停条約の廃止と旧
誓約同盟への復帰を宣言する。

しかし、旧属邦地域だった新し
い諸州が、ベルンや森林諸邦の旧
守派と対立し、ロシアの仲介に
り妥協。共和国下の十九邦にバ
レー、ヌシャテル、ジュネーブを
加えた二十二邦で、一八一五年八

月『誓約同盟』を再発足させた。

その折、他国と絡む領土問題は、『ウィーン会議』に委ねたが…列強と交渉。フランスにレマン湖右岸を譲らせて、飛び地ジュネーブをヴォーと陸続きとし、現在の領土を確定したのみか、スイスの『永世中立』を国際承認させる等…、転んでもただでは起きない。

けれども同盟規約は反動的で、個人的自由権の保障や経済的な統一政策は総て消滅。修道院や教会参事会の保護等の復古調。従ってベルン、フリブル、ゾロトゥルン、ルツェルンでは貴族支配が復活し、各邦独自の関税・通行税(四百種類)の復活や度量衡・通貨(十種類)の不統一等が流通を阻害して、やっと自立しかけた産業の足枷となる等、人びとの生活と矛盾する時代逆行が起る。

しかも、旧教勢力の拡大と新教の反啓蒙主義運動等が信仰の自由を抑圧するが、これを各邦は、宗旨変えや異宗派間婚姻に対する市民権剥奪等で支える。またヨーロッパの反動／ウィーン体制が、

列強の露骨な内政干渉を招く。

◇民衆／各邦憲法に個人の自由

こうした情勢にスイスの人びとは、これまでの歴史が培ってきた「実践的精神」(前掲／ガルブレイスの「実際性」)で、実にスイスらしい対処をする。それは『自由と統一』を目指す運動を、表立った抵抗ではなく、社会の様々な領域に…次々と自発的結社やクラブを創り、その全国的な統一組織化を進めて行く戦略である。

まずは一八〇七年に、自由主義改革派の討論の場であり、拠点となる「ヘルヴェティア協会」を再興するが、続いては「歴史研究協会」「自然探求協会」、穏健な「学生組合」等が動き始め、二〇年代には、広く民衆を含めた「射撃連盟」「体操協会」「合唱協会」等の全スイス統一組織を創って行く…。本来は非政治的なこれらの運動が、『スイスの統一』と『ウィーン体制からの自立』を目指す政治的色彩を内包するワケ。

そんな土壌から一八三〇年代には、『統一と民主主義化』を主張

する新世代の自由主義者が生れ、小市民層や農民層の支持を得て…各邦の改革を進め始める。

最初の改革はティチーノだ。寡頭支配の腐敗が、民衆の憲法改正要求となり、三〇年七月に自由主義的代議制度の新憲法を実現。これにパリの「七月革命」の刺激が加わり、各邦で憲法改正住民集会が支配層の抵抗を排して新憲法を実現。その数は十一邦、スイス全人口の三分の二以上に及ぶ。

これらの新憲法の共通的な特色は、(1)主権在民の明記、憲法改正の住民投票、議会議員直接選挙(2)執行府に対する議会議権の強化(3)個人的自由の大幅拡大等が挙げられる。それは建国以来初めて、スイスの人びとが「個人の自由」を自覚し、それを地域(邦)自治の中心に据えたことで、いま想うと、その意義は実に大きい。

◇挫折／新たな展開へのステップ
ところが、バーゼル、ヌシャテル、シュヴィーツ三邦の改革は、流血の衝突で、バーゼルは都市(旧守派)と農村(改革派)の半邦に

分裂。ヌシャテルとシュヴィーツは改革派が敗北した。しかもヨーロッパの反動的な動向もあり、新体制各邦の自由主義者たちは危機感を抱き、誓約同盟の改革を切実に求めて、一八三三年三月、新憲法体制を守る同盟規約の改革を目的に「七邦協定」を結ぶ。

それは当然、旧守派五邦を硬化させ、同年十一月これに対抗する「ザルネン同盟」が結成された。そこで、多数派の自信を持つ「七邦協定」側は、三三年十二月に同盟規約改正を提案するが、各小邦の特殊な事情で過半数に達せず否決される。それによって自由主義派の運動は大きく挫折した。

だがこの挫折から、『急進派』と呼ぶ…レファレンダム(住民投票で法律制定)やスイスの単一国家化等を主張する新改革派が誕生、スイスに新たな展開を導く。私は「民主主義にタイムリミットはない…」という、スイスの人らしい実践的な改革戦略とそのプロセスを想い…ただただ脱帽だ。

さわやかな危機感

わが組織 わが地域

—えひめ地域づくり研究会議

’93年次総会フォーラム—

えひめ地域づくり研究会議では、

去る十二月四日（土）、道後えひめ（松山市祝谷町）において’93年次総会フォーラムが開催されました。今回は、今年次から取り組んだ「新えひめ地域づくり活動支援事業」の活動事例報告と、『トーキング・ナウ』と題して、湯布院町の「亀の井別荘」主人の中谷健太郎さん、東京都文京区で地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を編集発行されている森まゆみさん、松山市で地域文化誌「ジ・アース」を編集発行されている忽那修徳さんの三人に、

いまを語っていただきました。当日は地域づくりの哲学を学ばうと県内各地域から約九十人の元氣人が集まりました。その模様を私見を交えて報告します。



◆「新えひめ地域づくり活動支援事業」活動報告から

この支援事業は、研究会議の本

来の目的である組織と組織、組織と人、人と人といった多様なかわりを持ち、大切（地域）の持っている課題を掘り下げる研修会やシンポジウム、フォーラムなど、地域づくりの風おこしとなるような活動を積極的に支援しようとするもので

す。’93年次は「岬十三里芋の会」

「瀬戸内中央地域研究会」「新居浜市建設技術研究会」「21世紀えひめニューフロンティアグループ」の四グループの活動が対象とされました。各グループの活動事例について紹介します。

◆広域のまちづくり

「佐田岬半島ウォッチング」

—岬十三里芋の会—

岬半島を歩いて、自分たちのふるさとを再発見しようということで平成三年から実施。三崎町、瀬戸町、伊方町、保内町、八幡浜市、三瓶町から有志が集まり、何らかの形で半島が一つになればと活動している。自分たちの住んでいるまちには、まだまだ知らない裏山や木々、小道がある。それらを再発見することにより、まちに愛着を持てるように」と無理のないようマイペースで頑張っている。

一回目は、海から半島を見た「海道ウォッチング」として三崎町を、そして三回目は瀬戸町を徒歩で探

索。ウォッチングをしたあとは、毎回地元で取れた海の幸を囲み手作りの食談会を実施している。実際に歩いてみると、「過疎の現状をまざまざと見せ付けられるとともに、岬半島の自然景観の良さに惹かれながら生きているんだな」と実感したという。



まさに地域に根差した活動への摸索と、次世代へ自身を持って語り継げる地域づくりが行われている。◆瀬戸内中央地域からのまちづくり

—瀬戸内中央地域研究会—

高速自動車道の延伸や架橋など、宇摩地域を取り巻く状況が著しく変化する中で、地理的優位性を活かし、情報発信をしながらふるさとに愛着を持てるような地域づくりのための組織をと、産・学・官・野の各分野から熱意あるメンバーが集まり、平成二年に結成した。単に宇摩地域が四国の中央に

あるというのではなく、対岸の中国地域をも視座において、最も注目される地域に発展してほしいという壮大な願いのもとに、「瀬戸内中央地域研究会」と名付けた。

依然として各市町村の縄張り意識が根強い中で、個々(各市町村)のレベルアップを図っていくとともに、宇摩地域として統一した意識の元に各施策が展開されるように、政策研究や提言を行っているというもので、三年間の研究の一区切りとして、愛媛県の将来ビジョンを描く「生活文化県政プラン21」の中の「四国交流エリア構想」に基づく幹線道路網の整備や四国の交流拠点としての施設整備などの研究提案をまとめあげることができた。

「研究の成果をまとめあげることが最終目標ではなく、提案にたいする反応を見極めながら、新たな政策研究を進めていきたい」とのことであった。

◆都市開発とまちづくり

―新居浜市建設技術研究会―
新居浜市は、JR駅前地区を「イ

ンテリジェントシティ」の新都心地区と位置づけ、土地区画整理や市街地再開発等の計画に取り組んでいる。これらを進めていくに当たり、地域の人々との関係を大切にしつつ、市民とともに進めるまちづくりを基調とした会議を作ろうと、公の施設に関わる人が中心となって技術職・事務職を問わず、意欲をもつ有志で結成された。

まずは、会員相互の交流を深めながら資質の向上を図り、その上で技術の向上を目指していく。資質向上のため、研究会では現在、講演会を企画しており、自分自身の中で「まちづくりとは何なのか」を問い直して、自分のまちに愛着を持ち、語り合えるような会にしていきたいということである。

◆塾からのまちづくり

―21世紀えひめ

ニューフロンティアグループ

21世紀の地域づくりを目指す「21世紀えひめニューフロンティアグループ」では、「21世紀の潮流」をテーマに、手つなぎの連帯から手放しの連帯をということで、会

員一人ひとりの自立と自己能力の開発、人と情報の柔らかなネットワークづくりを目指して、平成三年度から一年に四回(春―「青春塾」、夏―「朱夏塾」、秋―「白秋塾」、冬―「玄冬塾」、十年間で四十回の塾活動を開塾中である。「われ青春人」と思う人なら誰でも参加できる。

既に十一回を終了し、十二回目を迎えるに当たり、ちょうど三年目の一区切りということもあって、本来の塾とはどうあれば良いか、あるべき姿を研究するとともに、県下各地で開催されている多くの地域づくり塾の実態を調査研究することとしている。

「フロンティア塾に参加した一人ひとりがどう輝いていくかが基本理念、少しずつではあるがみな輝き始めていると思う。例えば、アコヤ貝の中で真珠が次第に輝きを持ち始めるという様子に似ていると思う。これからもプラスワンを追い求めていく」と力強く報告されていた。

事例報告

が終わった後、研究会の主要事業の一つである『海への手紙事業』のPRが実行委員の皆さんにより行われ、

松山のデュオ「パセリ」さんによる、イメージソング『海への手紙』の披露も行われた。

◆『トーキング・ナウ』から

このコーナーは、忽那さんをコーナーディネーターに中谷さん、森さんの対談形式で行われた。参加者の皆さんは、一言一句聞き漏らすまいといった風で、三人の話に聞き入っていた。

中谷さんは「閉鎖的な空間ではなくて開放的な空間であれば、それを大きくしていくことができるし、そこに、村に残っている技術や豊かさの根源みたいなものを凝縮していくことができると考え、



“パセリ”のおふたり

宿屋を大きくせずにモノを作る工房や食事ができるところなどを造った。人が来ては去っていく、来ては去っていくということを基本に、もてなしの心を大切にまちづくりに取り組んだ三十年間であったと思う。慌てて訳の分からないものに飛びついてしまつて、大事なものを無くさないようにしよう、よく見ればこれも大切なものじゃないかと考へながら「花水月」という雑誌づくりにも取り組んできた。

外から入ってくるものを見ないでいる、また、内であつてゐることの正体を見ないでいると、相手を見極めなかったがために逆に抵抗力を失ひ、打ちひしがれてしまう。本質的にこの地域は変わりゆくもの、変わらないとむしろつぶされる。だからきつちり正しく変わらうという考へ



だった。

「癒しと貧り」のバランスをきちつと、具体的に想定しておくこと。出せるものと出せないものを整理して、出せるものだけを癒しの手段として地域で受け入れることができることこそ大切なのではない」と語られた。眼光鋭く近寄りたいたいという最初のイメージとは裏腹に、ゆったりと落ち着いた口調の中から、湯布院への思いが溢れ出していた。

森さんは、理知的で才媛という言葉が似合う方で、しかも自分のまちのことを隅々まで知り尽くした上での表現が実に印象的でした。「手に負えるメディアをモットーに主婦三人で始めて、気がついたら十年経っていた。私たちのしていることは、ハードとは関係なく、



忽那 修徳さん

それによつて産業や企業の活性化を図るというものでもなく、まちおこしというものでもない。むしろ、環境悪化への防止策というのが出発点だったと思う。高層ビルや高速道などの開発を渴望し、自分のまちを蔑んでいた時期を乗り越え、逆で古いものが新鮮に見えてきて、壊されていくのが悲しく思えてくる。

中谷さんの言われる癒しの里と同じように、受容的コミュニケーションを大切にしていきたい。



森 まゆみさん



中谷健太郎さん

人を受け止めていきたいし、私自身も受け止められたいと思うから、受け止めてあげられる言葉遣いに気をつけているつもり」と語られていた。

フォーラムを終え、言いようのない充実感を覚えるとともに、自分たちで考え行動するために、自分の資質を向上していかなければいけないと改めて実感した会であったように思う。「百聞は一見に如かず」で、より理解を深めるために、現地を訪れたり、本を読んだりする、そういう努力を重ねていくことが自分を磨くことにもつながっていくのではないだろうか。今後人の心を揺さぶり、元氣が出るような、質の高いフォーラムの開催を期待したい。

最後にこのフォーラムを開催するにあたり、何かとお世話になりました関係各位の皆さまに、誌面をお借りしてお礼申し上げます。

(研究員／藤原元久)



この度、童心に
返り今風の地域
づくり書を作成
しようと、マン

全国各地で「地域づくり・町づくり」の様々な手法が展開されています。各地のリーダーたちの意見として、「町づくりには、十年〜二十年の歳月がかかる」ということをよく聞きます。

しかし、地域づくりの研修の参加者はほとんどが青壮年者であり、最近では、女性リーダー云々と様々。十年〜二十年後の青壮年は誰かと「はつと」気づいた時、「今の子供たちは、地域づくりをどう考えているのか」「どう指導してやれば良いのか」ということから

マンガで 地域づくり

瀬戸町

ガ「風の町」
〜さらめき
をもとめ
て」を発売
しました。

この本の
狙いは、地
方において
新しい「事



おこし」をする時、地域の風土や習慣が如何に障害となるのか、そして後継者がいないとか定住化しないとか嘆く最大の原因は、日々の身近な生活にも問題があることを知っていただき、真の住み良い環境づくりに目覚めていただくことです。

また、地域の生活や文化を軽視する傾向がありますが、自分の郷土に自信の持てることが郷土愛につながっていくと思ひ製作したものです。この本が、子供たちにい刺激になれば幸いと念じているところです。

この本に対するご意見、お問い
合わせは瀬戸町役場企画課へ。

☎ (0894) 5210111

桜井総合公園は、今治市の東部桜井に位置し、温泉と海浜を活用した保養滞在型リゾートとして整備が進められている湯ノ浦地区にあります。市民の多様なニーズを満たす新しいレクリエーションの拠点として、三期にわたり拡張整備を進めて参りましたが、この度装いも新たに開園いたしました。

既存の野球場、テニスコート、日本庭園等に加え、延長二百十八mの滑走路を一気に滑り降りる「ボブスレー」、モノレールカーの「湯ノ浦号」、延長七十二mの人工芝を豪快に滑り降りる「芝生すべり」、瀬戸内海の島々が一望



できる「展望塔」、その他芝生広場や親水広場等も整備され、開園面積は十二haとなりました。

また、湯ノ浦温泉を活用したク

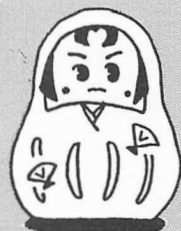
アハウスや湯ノ浦ハイツ、リゾートホテル等が隣接す



るとともに、豊かな自然にも恵まれており、子供から大人まで多くの皆さん方に満足していただけるものと確信しています。
ぜひ一度ご来園ください。

遊び体験 今治から
桜井総合公園オープン

今治市



青い海への想いを手紙に託し 健やかな〈ふるさと〉を 私たちの手で



海への手紙募集

私たちは、太古の昔から海を重要な交通路とし、海の幸にも恵まれてきました。それだけに“海への想い”は強いものがあります。その想いを寄せ合うことで「海」（地球環境）への関心を呼び起こすとともに、その想いを広く発信し、手を取り合って美しい海を取り戻したいと思います。それは、清らかな川、豊かな森づくりにもつながります。

「海への手紙事業 '93」では、海に対する一人ひとりの体験・感想・提言・反省などを綴った「海への手紙」を広く県内から募集して、今秋に出版し、種々の草の根運動への足掛かりにしたいと考えております。

【応募の要領】

- ・資格／県内に住む人で、年齢、性別、国籍は問いません。
- ・手紙／1,000字程度。なるべく400字詰め原稿用紙で。住所、氏名、年齢を記入。
- ・送り先／松山市三番町8丁目234番地 愛媛県まちづくり総合センター内
えひめ地域づくり研究会 海への手紙事業事務局
- ・締め切り／第1次期間は平成6年6月30日まで

波のオーナー募集

世界、日本の海、湾、湖など、あなたのお好きな海水面の「波」のオーナー（所有者）になりますか。オーナー料は一人一口500円です。すぐに消える波ですが、これは海への関心を高め、同時に手紙出版や各種イベントの費用に当てるのが目的のユーモラスで楽しい“私的・文学的”募金制度です。オーナーには、美しい海づくりの担い手であることを示すオーナーバッジ「ウェービー」、企業・団体にはオーナー証書を贈ります。

【応募の要領】

- ・振り込み先／郵便振替口座 徳島0-26867（平成6年4月まで）
同 01600-2-26867（同5月以降）
松山市三番町8丁目234番地 愛媛県まちづくり総合センター内
海への手紙事業事務局

主催／えひめ地域づくり研究会 海への手紙事業実行委員会

後援／WWF〔財世界自然保護基金日本委員会〕 四国郵政局 愛媛県 愛媛県教育委員会 愛媛県市長会 愛媛県町村会 〔財愛媛県市町村振興協会〕 愛媛県漁業協同組合連合会 愛媛県農業協同組合中央会 愛媛県森林組合連合会 愛媛県離島振興協議会 愛媛県離島青年協議会 愛媛県PTA連合会 愛媛経済同友会 愛媛新聞社 NHK松山放送局 南海放送(株) 愛媛放送(株) (株)伊予テレビ (株)エフエム愛媛

お陽さまが覗いたと思ったら、雲がいばつてみたり。そうかと思えば北風小僧がはりきつてかけぬけたり…。はつきりしないお天気が続いていますが、春は確実にすぐそこまで来ますよ。さて、平成六年第一号の「舞たうん」いかがでしたか。今年もがんばりますので、よろしくお願ひします。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のM.S.（中路・川原）まで
〒790 松山市三番町八丁目
二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行／平成六年二月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会